言葉の不思議

寺田寅彦

青空文庫

「鉄塔」第一号所載木村房吉きむらふさきち氏の「ほとけ」の中に、自分が先年「思想」に書いた言語の統計的研究方法（万華鏡まんげきよう所載）に関する論文のことが引き合いに出っていたので、これを機縁にして思いついた事を少し書いてみる。

「わらふ」と laugh についてもいろいろなおもしろい事実がある。laugh は (AS.)hlehan から出たことになっているらしいが、この最初の h がとれて英語やドイツ語になり、その h が「は」になり、それから「わ」になったと仮定するとどうやら日本語の「笑ふ」になりそうである。ギリシアの gelao も g が ρ になり、それから g がとれて、「は」「わ」と変わればやはり日本語になるからおもしろい。(L.)rideo, (Fr.)rire は少しちがうが「ら」行であるだけはたしかである。「げらげら笑ふ」「へらへら笑ふ」というから g+h や h+h のような組み合わせは全く擬音的かもしれない。マレイの galak も同様である。馬の笑うのは ilai でこれは日本に近い。

「あざ笑ふ」の「あざ」は「あさみ笑ふ」の「あさ」かと思うがこれは (Skt.) $\sqrt{\text{has}}$ に通

じる。一人称単数現在なら *hasami* だからよく似ている。[*ha_sita*] は笑うべき事で「はしたない」に通じる。「はしやぐ」が笑い騒ぐ事で、「あさましい」も場合によると「笑ひ事」であるのもおもしろい。

セミティックの方面でも (Ar.)*basama* は「微笑する」で「あさむ」「あさましい」と似ている。しかし「笑ふ」の *dahika* はむしろ「たはけ」に似ている。(Ar.)*faraha* は「喜ぶ」で「わらふ」に似ている。

「あさましい」はまた (Skt.)*vismayas* で「驚く」ほうにも通じるが、それよりも元の *smi*, *smaya* で微笑にもなる。

(Skt.)*garh* は非難するほうだが軽蔑けいべつして笑うほうにもなりうるのである。これも *g+r* である。そう言えば「愚弄ぐろう」もやはり *g+r* だから妙である。

「ズらぼう」も引き合いに出したが、これについて手近なものは [(Skt.)*prabhu*] また *para ma* で「ズれも」「ズらぼう」の意がなくはない。しかしまた、「強い」ほうの意味の *bala* から出た *balavat* だって似ていなくはない。「珍しい」「前例のない」ほうの [*apra_pya*, *apurva*] でも、やはり日本式ローマ字で書くと *p+r+b(m)* の部類にはいる。これらはサン・スクリトとしてはきわめて明白に、それぞれ全く異なる根幹から生じたものであるのに、

音のほうではどこか共通なものがあり、同時に意味のほうにも共通なものがあるから全く不思議な事実である。

英語の brave や bravo も「べらぼう」の従兄弟であるが、これはたぶん (L.) barbarus と関係があるという説がある。そうとすればギリシアの Barbaros とも共通に、外国人を軽蔑していつときの名であったらしい。しかし「勇敢」では少しくあいが悪い。また一方で Barbarossa が「赤ひげ」であるのも不思議である。

[(Ar.) gharib, ghuraba] 「異常」は喉音の g をとると「わらふ」にも似てゐし、h を b に変えると「べらぼう」のほうに近づく。すると結局「わらふ」と「べらぼう」も従兄弟だから再従兄弟だかわからなくなるところに興味がある。ついでに [(Skt.) ullasita_] が「うれしい」で (L.) jocus が「茶化す」に通じるのもおもしろい。

barbarus で思いだすのは「野蛮」と (Skt.) yavana である。後者は、ギリシア人 (Ionian) であつたのが後には一般外国人、あるいは回教徒の意に用いられ、ちやうどギリシア人の barbaros に相当するものになつてゐるからおもしろい。東夷南蛮の類であり、毛唐人の仲間である。この「ヤワナ」が「野蛮」に通じまた「野暮な」に通ずるところに妙味がな

いとは言われない。

またこの「毛唐」がギリシアの「海の化けもの」[ke'tos]に通じ、「けだもの」、「気疎い」にも縁がなくはない。

話は変わるが二三日前若い人たちと夕食をくったとき「スキ焼き」の語原だと言って某新聞に載っていた記事が話題にのぼった。維新前牛肉など食うのは禁物であるからこつそり畑へ出てたき火をする。そうして肉片を鋤すきの鉄板上に載せたのを火上にかざし、じわじわ焼いて食ったというのである。こういうあんまりうま過ぎるのはたいていいうそに決まっていると言つて皆で笑つた。そのときの一説に「すき」はsteakだろうというのがあつた。日本人は子音の重なるのは不得意だからstがsになることは可能である。漆喰しっくいがstuccoと兄弟だとすると、この説にも一顧の価値があるかもしれない。ついでに(Skt.)jvalは「燃える」である。「じわりじわり」に通じる。

なすの「しぎ焼き」の「しぎ」にもいろいろこじつけがあるが、「しき」と変えてみると、結局「すき」と同じでないかという疑いが起こる。

steakはアイスランディックのsteikと親類らしいが「ひたきのおきな」の「ひたき」を

「したき」となまると似て来るからおもしろい。「焚^た」くは (Skt.)*dah*に通ずるがこのほうはよほどもつともらしい。(Ice.)*steik* は *steka* と親類で英語の *sick* すなわちステッキと関係があり、串^{くし}に刺して火にあぶる「串焼き」であつたらしい。このステッキがドイツの *stechen* につながらんとすると今度は「突く」「つつく」が *steik* に近づいて来るし、また後者と「鋤^すく」ともおのずからいくぶんの縁故を生じて来るのである。

こんな物ずきな比較は現在の言語学の領域とは没交渉な仕事である。しかし上述のいろいろな不思議な事実はやはり不思議な事実であつてその事実は科学的説明を要求する。どれもこれもことごとく偶然の現象だとして片付ける前にもかくも何かしら合理的な方法のふるいにかけて吟味しなければならぬ。しかし従来のように言語の進化をただ一次的、線的のもののように考えるあまりに単純な基礎仮定から出発した言語学ではこの問題は説明される見込みはない。たとえば自分がかつて提議したような統計的方法でも、少なくとも一つの試みとして試みなければならぬと思う。上記の諸例はそういう方法を試みるであろう場合に必要な非常に多量な材料の中の二三の例として数えられるべきものであると思う。

もし許さるるならば、時々こういう材料の断片を当誌の余白を借りて後日のために記録しておきたいと思う。
(昭和七年十二月、鉄塔)

二

錨いかりと怒り、いずれも「イカリ」である。ところが英語の anchor と anger が、日本人から見ればやはり互いに似ている。「アンカー」と「アンガー」である。

anchor はラチンの anchara でまたギリシアのアンキユラで「曲がったかぎ鉤」であり、従ってまた英の angle とも関係しているらしい。ペルシアでは [a₁ngar] である。サンスクリトの [a₁ngala] は鋤すきであるがしかし錨のような意味もあるらしい。同時に membrum vtile の意味もある。ロシアの錨はヤーコリである。こうなるとよほど日本語に接近する。「イカリ」はまた「いくり」にも似ている。

anger はアイスランドの [a₁ngur] や上の angor などのような「憂苦」を意味する言葉と関係があるそうで、一方ではまたスウェーデンの「悔恨」を意味する [a₁ngur] に通ずる。このオンゲルは「オコル」に似ている。

怒りを意味する *cholera* はギリシアの胆汁たんじゆうのコレラから来ているようで、コレラや *all* や *yellow* なども縁があるそうである。イカリのイが単に発語だと仮定するとこれがやはり似通にかよって来るからおもしろい。ギリシアのカレポス、オルギロス、アグリオスいずれにしても *k* または *g* の次に *l* または *r* の音がつづいて来るのがおもしろい。

ロシアでは *g* が *h* に通ずる。日本では *h* が *f* に通ずる。それで *g r* の代わりに *f r* を取ってみると英国の激怒 *fury*, *l* の *furia*, *furere* に対する。

九州へんでは *d* が *r* に通ずる。そこで、*g r* の代わりに *g d* を取ってみると、アラビアの動詞 *ghadiba* (怒り) の中に見いだされる。この最後の *ba* は時によりただの *b* によって響きを失うことはあるのである。

名古屋なごやへんの言葉で怒ることをグザルというそうであるが、マレイでは *gusari* となっている。土佐とさの一部では子供がふきげんで *guzu-guzu* いうのをグジレルと言い、またグジクルという。アラビアでは「ひびく怒らせる」が [gha_za] である。

ロシアの「怒り」*gniev* はギリシアの動詞 *aganaktein* の頭部に似ている。古事記の「このふ」にも似ている。*gn* をロシア流に *gn* にする一方で、「忿怒ふんぬ」から「心」を取り去って、呉音で読めば *hnn* である。

英語の gnari は「ひなる」に通じる。「がなる」にも通じる。英語の vex は「の uehere に関係し「運搬」の意がありサンスクリトの vah から来た」とある。日本でもオコルとオクルが似ているのと相對しておもしろい。h は往々 k h また k に通じるから uehere と ukor とはそれほど遠く離れていないのである。weigh もやはり縁があるとの事である。vah は「負う」に通じる。

腹を立てる、腹立つというのはあて字であろうと思われる。サンスクリトの krudhyati の k を h で置き換えるともかくも hrdi という音列を得られる。これを haradati の子音と比べると同一である。偶然とするとかなり公算の少ない場合の一致である。ロシアの serd にもやはりいくらか似ているのである。苛立つが iritate(L. irritare) に似ていることは明白である。

「あらゆる神」の「アラブル」がしに rabere = to rage に似ていることも事実である。

「床屋」が何ゆえに理髪師であるか不思議である。「髪結床」^{かみゆいどこ}から来たかと思われる。その「床」がわからない。

マレイ語で頭髮を剃るのは chukor であり女の髪を剃るのが tokong である。また蘭^{らんりょう}

領インドでは「店」が toko である。

マレーの理髪師は tukang chukor また tukang gunting である。

アラビアでは「店」が dukkan, ペルシアでも dukan である。ペルシアの床屋さんは dalla である。

ギリシアで剃るのは xurein でわが suriに通じる。髪を切る意味の cheirein は「切る」「刈る」に通じる。

Skt. kshura は剃刀^{かみそり}。krit は切るであるとする不思議はない。

おもしろいことは、土佐で自分の子供の時代に、紙鳶^{たこ}の競揚をやる際に、敵の紙鳶糸を切る目的で、自分の糸の途中に木の枝へ剃刀の刃をつけたものを取り付ける。この刃物を「シューライ」と名づける。これは前記のサンスクリトの「クシューラ」とよく似ている。これはたしかに不思議である。

床屋も不思議だがハタゴヤもなぜ旅館だかわからない。

ギリシアの宿屋が pandochion でいくらか似ているのはおもしろい。パドケヤとハタゴヤである。pan と dechomai, すなわちだれでも接待する意だそうである。衆生を濟度する仏がホトケであるのは偶然の洒落^{しゃれ}である。

ラテンで「あるいはAあるいはB」という場合に *alius A, alius B* とか、*alias A, alias B* とか、また *vel A, vel B* という。 *alius* と *vel* とは別物であるのに、どちらも日本の「アル」に似ているからおもしろい。英語の *or* でも少しは似ている。Sk. の「または」「あるいは」は *athawa* である。

ロシアで「すなわち」というような意味で、*znatchiti* を使う。日本の *snati* と似ている。また *tak kak* というのがいろいろの意味に使われるが *whereas* の意味では、「それはさうととにかく」の「兎角」に通じなくない。兎の角うさぎつのではどうにも手に合わない。

ドイツの *noch*(=*nun auch*) が日本語の *naho* に似ている。イタリアの *eppure* は日本の「ヤッパリ」と同意義である。

因果関係はわからなくても似ているという事実はやはり事実である。

ことばの事実を拾い集めるのが言葉の科学への第一歩である。玉と石とを区別する前に

は、石も一応採集して吟味しなければならない。石を恐れて手を出さなければ玉は永久に手に入らない。

(昭和八年四月、鉄塔)

三

春(ハル)のラテン語が ver であるが、ポルトガル語の [vera:o] は夏である。ペルシアの春は [bahar], 蒙古(もうちゆう) (カルカ) 語では habar である。ドイツ語の [Fru:hing] は [fru:h] から来たとすればこれは f と r である。かなで書くとみんなハ行とラ行と結びついている点に興味がある。アイヌ語の春「パイカラ」はだいぶちがうが、しかし p を b に、k を h に代えるとおのずからペルシアの春に接近する。この置き換えは無理ではない。「張る」^は「ふえる」「腫る」なども h または f に r の結合したものである。full, voll, π λ ω などとも連想される。

夏(ナツ)と熱(ネツ)とはいずれも n と t の結合である。現代のシナ音では、熱は「o」の第四声である。「如」がジヨでありニヨであり、また「然」がゼンでありまたネンで

あると同じわけである。蒙古語の夏は「*ju:n*」である。朝鮮語の「ナツ」は昼である。しかし朝鮮語で夏を意味する言葉は「ヨールム」で熱がヨールである。yをjに、語尾のrをtにすると（この置き換えもそれほど無理ではない）シナの現代音になる。ハンガリーの夏は「*nyar*」（ニヤール）。コクネー英語でhotはotであるがこれは日本語の「アツ」に似ている。フランスの夏が「*ete*」であるのもおもしろい。アイヌの夏sakは以上とは仲間はずれであるが、しかしアラビアのsaifに少し似ているのがおもしろい。語尾のkはkhからhになる可能性があり、日本ではhがfになるのである。

秋（アキ）は「飽く」や「赤」と関係があるとの説もあるようであるが確証はないらしい。英語のautumnが「集む」と似ているのはおもしろい。これはラテンのautumnusから来たに相違ないが、このラテン語はaugeoから来たとの説もある。このaugがアキとは少し似ている。「あげる」「大きい」なども連想される。

秋（シユウ）が現在の日本流では、「収」「聚」と同音である。

冬（フユ）は「冷ゆ」に通じ「氷」に通じスル※ル（雪）にも通じる。露語のzimaは霜（シモ）や寒（サム）や梵語のhima（雪）やラテンのhiems（冬）やギリシアのcheim on（冬）やまたペルシア語のsamai（寒い）にも似ている。フィンランド語のkuura（霜）

は日本の「こほり」の音便読みに近い。英語の cold は冷肉（コールミート）のコールである。氷こほりるに近い。朝鮮語で冬は「キョーウル」である。ヘブライ語の寒さも「コール」である。

Winter は日本語の「いてる」とどこか似ているとも言われよう。

フランス語の冬 hiver はラテンの hibernum であろうがこれを「冷える」と比べてみるのも一興である。

日本の山には「何々やま」と「何々だけ」とがある。アラビアの山 *jabal* ペルシアの山 *jebel* は一見「ヤマ」と縁が遠いようであるが *j* が *y* になり *b* が *m* になる例は多いようであるから、それほど無関係ではない。（邪はジャでありヤである。馬はバでありマである）トルコ語の山 *dagh* は「だけ」に似ている。アジア中部には *egh* のついた山がいろいろある。ターグは「たうげ」に似ている。

ドイツ語の屋根 *Dach* は上記の *dagh* に通じる。「棟むね」が「峰みね」に通ずるのと類する。アイヌの「ヌプリ」は「登り」に通じ、山頂を意味する「タプカ」も「峠（タウゲ）」に少し似ている。峠が「たむけ」の音便だとの説は受け取れない。

山（シャン、サン）の仲間はやつと見当たらないが、しかしアイヌの「シン」は地や陸を意味すると同時にまた「山地」（平地に対する）をも意味するそうである。これに多数を意味する接尾音をつけた「シンヌ」はたくさんな山地でこれが「信濃しなの」に似るなどちよつとおもしろいお慰みである。

アイヌ語「シリ」はいろいろの意味があるがその中で陸地を意味する場合もある。またこれに他の語が結びついた時には「シリ」が山を意味する事もあるらしい。この「シリ」が梵語ぼんごの山「ギリ」に通じる可能性がある。

この「ギリ」は露語の「ゴーラ」に縁がありそうに見える。箱根はこねの強羅ごうらを思い出させる。また信州しんしゅうに「ゴーロ」という山名があり、高井富士たかいふじの一部にも「ゴーロ」という地名がある。上田地方うえだ方言で「ゴーロ」は石地の意だそうである。土佐の山にも「ナカギリ」という地名がある。

日本の山名に「カラ」「クラ」のついたの多い事を注意すべきである。「丘陵」もkとrである。

一方ではまた露語でgがhに代用されまた時にvのように発音されることから見ると、フィン語の山 vuori やチェック語の hora が同じものになるし、hが消えたりvが母音化する

るとギリシアの oro や蒙古の oola も一つになって来る。またヘブライの山 Har も親類になって来るから妙である。

ドイツの Berg はだいぶちがうが、しかし g を流動的にし、b を v にすればフィン語に接近し、b を唇音の m へ導けばタミール語の mala に似て来る。後者は「盛り土」の「盛り」に似る。日本で山の名に「モリ」の多いのが、みんな「森」の意かどうかかわからない。

ラテン系の mons, monte, montagne, mountain 等は明白な一群を形成していて上記とは縁が遠く見える。これに似た日本語はちよつと思ひ出せない。無理に持つて来れば 饅頭 まんじゅう が mound に似ている、これはおかしい。

ハンガリア語の山 hegy (ハチ) が「飛驒」ひだ に似ているのが妙である。この g はむしろ d に似た音であるから。日本語「ひたを」は小山の意である。

ペルシア語の小山 kuh (クフ) は「丘」きゆう や「岡」こう に縁がある。アイヌの「コム」もやや似ている。この「コム」は小山であり、また瘤いぼである。すなわち m を b に代えたのが日本語の「いぼ」である。これと多少の縁のあるのが英語の knob, hump, hummock, ドイツの Knopf, Knaut などもである。その他「瘤」の仲間にはマレーの gmbal, ロシアの gorb, ズール

ーの *kuhan*, ハンガリアの [*gomb, csomo*] 等である。

オロチは「丘の霊」だとの説がある。「オ」は「丘」で「ロ」は接尾語だということである。この「オロ」がギリシア語や蒙古語（もうこご）の山とそっくりなのがおもしろい。

「ムレ」は山の古語だそうであるが、これは上記タミール語の *malai* に少し似ている。朝鮮のモイよりもこのほうが近い。また前述の理由からドイツ語やフィン語とも音声的に縁がある。

毎回断つているとおり、相似の事実を指摘するだけで、なんらの因果関係を付会するつもりはないから誤解のないように願いたい。

（昭和八年七月、鉄塔）

四

「ウミ」（海）のヘブライ語が [*ya'm*] である。「ヨミノクニ」は黄泉でもあるがまた「海」だとの説もあったように思う。この「ヤーム」が「ウミ」よりもむしろ「ヤマ」に似ているのがおもしろい。西グリーンランドのエスキモーの言葉 *imag* は海で *imeq* は水であ

る。pはいろいろに変化するから *ima, ime* が「ウミ」であり水である。英語の *humid* (水
 けある) の終わりの d をとれば「ウミ」に近くなり、第二綴字てっじだけだと「ミヅ」になる。

英の *sea* はチュートンの [sæ&] から来たとある。 *saiwiz* も連関している。これが
 「ウシホ」(ウシオ)の「シオ」と少しは似ている。

「ワダツミ」「ワダノハラ」の「ワダ」は *water* や露の *voda* やその他同類の水を意味す
 る言葉と類し、また「ワタル」という意味の *wade(L. vadere)* および関係の諸語と似てい
 る。梵語ぼんご *udāhi* (海) が単数四格で終わりに m がつけば「ワダツミ」に近づく。

「オキ」(沖)はギリシア「オーケアノス」の頭部に似る。

「カタ」(潟)はタミール語の海 *Kadal* に近い。

朝鮮のパーターはやはり「ワタ」の群に入れ得られよう。

「ナダ」は梵語の川 *nadi* に似ている。

「カハ」(川、河、カワ)は「河」ホと実際に縁がありそうである。その他にはシンハリー
 スの *Banga* (川)とわずかばかり似るだけで、他にちよつと相手が見つからない。

「ナガレ」はもちろん「流れ」であるが、ある人の話では「ナガ」は「長」で「ルル」が

「流」であろうとの事である。これを「リウ」と読むとギリシアの「レオ」（流れる）に近い。

トルコの「ネフル nehr」（川）はhを例のgにすると、「ナガレ」に近よる。

朝鮮の「ナイ」（川）とアイヌの「ナイ」（川、谷）はそっくりであることから見ると日本内地でも同じ言葉で川を意味する地名がありそうに思う。

土佐に奈半利川なはりと伊尾木川いおきとが並んでいる。おもしろいことには、アラビア語の川は「ナフル」、ヘブライのが「ナハル」「ナーバル」等。フィン語の川は yoki 「エキ」である。もちろん、直接の縁があるとは思われぬ。また上記の川名も川の名が先か土地の名が先か、それもわからない。「なばりの山」もあるから。

朝鮮の「ムール」は蒙古語もんこくごらしい。カルカ語の川は [mure:n] である。

人間の頭部「かうべ」「くび」に連関して「かぶと」「かむり（冠）」「かぶり」「かぶ（株）」「かぶ（頭）」「くぶ（くぶつち）」「こぶ（瘤）」「かぶら（蕪菁）またかぶ」「かぶら（鐘）」「こむら（腓）」「こむら（槌）」などが連想される。これに対して想起される外国語ではまず英語でもあり、ラテンの語根でもあるところの cap がある。

青森あおもりの一地方の方言では頭が「がっぺ」である。ラテンの *caput* は兜かぶととほぼ同音である。独語の *Kopf, Haupt* も同類と考えられる。ギリシアの $\kappa\epsilon\phi\alpha\lambda\omicron$ ※, マレイの *kpala* は「かむり」「かぶり」の類である。

和名鈔わみやうしやうには「顱ろ 和名加之良乃加波長 脳蓋也のうがいなり」とあるそうで「カハラ」は頭の

事である。ギリシアやマレイとほとんど同一である。

アラビアの頭骨 *qahun* は「カフフ」で「かうべ」に近い。

英語の円頂閣 *cupola* はラテンの *cupa* (樽たる) から来たそうであるが、現在の流義では同一群に属する。

英語の *head* はチュートン系の *haubd* といったような語から来ているが、音韻法則によると *h* のカプトとは別だそうである。しかしこの「ハウプト」は、そんな方則を無視する。この流義では、やはり兜の組である。

頭部を「つむり」とも言う。これは *h* の *tumuli* (堆土たいど) と同音である。 *cumuli* (積雲) は「かむり」のほうである。

「あたま」も頭部である。梵語ぼんご [a_tman] は「精神」であり「自己」である。「たま」は *top* に通じる。

敵の首級を獲ることを「しるしをあげる」と言う。「しるし」が頭のことだとすると、これは梵語の *siras* (頭)、*sirsham* (頭) に似ている。

八頭の大蛇を「ヤマタノオロチ」という。この「マタ」が頭を意味するとすると、これはベンガリ語の [ma^hta] (頭) やグジャラチの [ma^hthon] やヒンドスタニ語の *mund* に縁がある。これが子音転換すれば「タマ」になる。

髑髏を「されかうべ」と言う。この「され」は「曝れ」かもしれないが、ペルシア語の *sar* は頭である。

「唐児わげ」を「からわ」という。日本紀にほんぎに角子を「あげまきからわ」と訓してあるようで、もしかすると「からわ」また「からは」は初めには頭を意味したかもしれない。とにかくロシアの *golova*, *glava* (セルボ・クロアチアも同じ)、チエツコの *hlava*, ブールの *in hoko* (*in* は接頭語) 等いずれも「カラワ」と音が近い。

またこれらは子音転換メタテシスによれば前述の *kh r* の群になるのである。

冠かんむりの「イソ」というのは俚言集りげんしゅうらん覧には「額より頭上をおおう所を言う」とあるが、シンハリス語の *isa* は頭である。ハンガリアでは *esz* がそうである。もっとも「イソ」はまた冠の縁や楽器の縁辺でもある。海の縁でもあるから、頭と比較するのは無理かもし

れない。しかし「上」は「ほとり」と訓よまれることがあるのである。

「かうべ」の群中へ、かりに「神かみ」と「上かみ」も「髪かみ」も入れておく。

朝鮮語「モーリ（頭）」は「つむり」の「むり」と比較される。「つ」はわからない。
蒙古もつこカルカ語の *tologai* はタミール語の [talai:] に通じる。

「かしら」に似たものがちよつと見つからなかった。ところがLの *capillus* はもとは *cap*（頭）の *dim.* だそうで *caput* や、ギリシアの「ケファレ」も同じものである。そうして、この「カピラ」は「毛髪」の意に使われている。これが「カヒラ」を経て「カシラ」になりうるのである。言海によると「カシラ」は「髪」の意にも使われているからちよつど勘定が合うのである。そうすると「かしら」も結局「かむり」「かぶり」の群に属する。

（昭和八年八月、鉄塔）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第七巻」岩波書店

1961（昭和36）年4月7日第1刷発行

初出：「鉄塔」

1932（昭和7）年12月1日

1933（昭和8）年4月1日、7月1日、8月1日

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Cyobirin

校正：松永正敏

2006年7月13日作成

2012年6月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

言葉の不思議

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>